Anatoly D. Sheremet教授(国立モスクワ大学、ロシア)の短期招請について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学国際交流センター 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 章 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4757

Ⅱ　Anatoly D. Sheremet教授（国立モスクワ大学、ロシア）の短期招請について

商学部教授　森　　章

ロシア連邦の国立モスクワ大学教授アナトリー・ダニロビイチ・シェレメット博士は、短期招請プログラムにより、1994年７月２日に来日し、約３週間本学の客員教授として滞在して、７月23日に帰国した。この間に、シェレメット教授は、７月６日には一部の学部学生を対象とした講演、７月７日には教員と大学院生を対象とした研究発表、７月15日には二部の学生を対象とした講演をそれぞれ行った。

シェレメット教授は、約35年間モスクワ大学経済学部で講師、助教授、教授として教鞭を執り、1955年には博士候補（準博士）、1971年に経済学博士、1972年に経済学部の会計部門長となり、また、この間に、約40名の研究者を育て、10人以上に博士号を与えた教育研究者であり、そして、「ロモノーソフ賞」を授与された学者である。

シェレメット教授の専攻とする研究分野は会計学であるが、教授はこの分野で約200編 近い研究業績を発表しており、これらの労作の１部は、ロシア語から翻訳されて、旧東ドイツ、チェコスロバキア、ブルガリア、ハンガリー、ベトナム、そして最近では、アメリカ、フランスなどでも公表され、教授は、国際的にも著名である。とりわけ、教授のもっともすぐれた研究としては企業の経営分析についての労作を挙げることができるが、ソ連邦崩壊後の現在でも、その労作は再版されてひろく購読されている。

また、シェレメット教授は、「独立国家共同体（ＣＩＳ）会計・監査士協会」と「ロシア会計・監査士協会」の代表者であり、また、ＣＩＳの「会計に関する国際調整委員会」の委員、ロシア政府の「会計・監査に関する国際コンサルタント委員会」の委員として活躍している。このため、これらの社会的活動をとおして、教授はロシア連邦内だけでなく旧ソ連邦領域でもよく知られている学者である。現在、

教授の所属するこれらの団体や機関は、これまでの計画経済のもとにあった旧会計制度を改編して、これからの市場経済に合った新しい会計制度を創出する課題に取り組んでいるが、この会計改革において、教授は大きな役割を果たしているのである。

本学で行われたシェレメット教授の講演と研究発表は、教授の長年にわたって蓄積されてきた研究の内容と、新生ロシアの会計改革での豊富な現実の経験とにもとづいて行われた。したがって、それは、極めて貴重な充実したものであり、統一テーマ「ロシアにおける会計改革」のもとで、相互に密接に関連した首尾一貫した内容のものとして実施された。

7月6日、11号館32番教室で行われた講演のテーマは、「ロシアにおける市場経済への移行と会計改革」であった。この講演では、教授は、1991年末のソ連邦崩壊後の新生ロシアにおける世界史上初めての計画経済から市場経済への移行と、この移行期における新しい企業会計制度の構築のための諸問題を明らかにした。そして、1）市場経済のもとで発生する取引を記帳するための勘定科目表の制定、2）この勘定で把握された会計データを処理するための会計基準の設定、3）処理された会計データで企業の財政状態と経営成績を示す財務諸表の体系と様式の決定、4）作成し公表される財務諸表に対する公認会計士や監査法人による監査のための法定監査制度の創出などが必要であることを強調した。そのうえで、ひとつの整合性のある企業会計のフレームワークの中に、財務会計、管理会計、原価計算、税務会計などをどのように位置づけようとしているかを示した。

7月7日、駿河台研究棟第3会議室で行われた研究発表のテーマは、「ロシア企業と経営分析－生産能率の総合的評価の方法を中心として－」であった。この研究発表では、第1回の講演で指摘した市場経済への移行期における会計上の諸問題のうち、とくに企業の経営分析をとりあげて、教授が提唱する生産能率の総合的評価の方法を明らかにした。その内容は、『招請外国人研究者講演録』（1994年度№3）で公表されているが、教授は、資源活用の量的指標として、1）従業員の数、

2）消費された労働対象の量、 3）減価償却の大きさ、 4）生産用固定資産の量、 5）前払いした流動資産の量を、また、質的指標として、 1）労働生産性、 2）原材料効率、 3）固定資産効率、 4）流動資産回転率をそれぞれとりあげ、そして、ひとつのモデルを使って、これらの指標の相互関連のもとでの生産能率の総合的評価を力説した。

7月15日、11号館32番教室で行われた講演のテーマは、「ロシアにおける会計教育の課題」であった。この講演では、教授は、新生ロシアで市場経済のための企業会計制度が構築されたとしても、その制度を円滑に運営していくには、この制度を熟知した多くの会計人がいなければならないことを明らかにした。そのためには、新しい会計知識と高い職業倫理をもった公認会計士の輩出を図っていくと同時に、大学や社会団体での会計教育が重視されねばならないことを強調した。そして、現在、会計人を、 1）会計・記帳係、 2）会計・技術士、 3）会計エコノミスト、 4） 職業会計・監査人の４段階に区分し、これらの会計人の研修、教育、養成の各プログラムが策定され、この計画に沿った活動が教育機関や社会団体で行われていることを示した。

以上のようなシェレメット教授の一連の講演と研究発表から、われわれは、計画経済から市場経済への移行期のロシアでは現在、敗戦直後の日本の会計学界と極めて類似した状況下で、会計の最も根本的な課題の解決に取り組んでいることを知ることができた。それは、世界史上稀にみる体制転換の過程で垣間みることができた新生ロシアの会計改革の内容と照らして、日本などの先進資本主義諸国ではすでに解決済みと思われがちな会計のあり方を改めて考えさせられるものであった。そして、会計の理論、制度、実務がいかに経済体制によって強く影響を受ける一方で、経済体制が転換すると、「変わる会計」と「変わらぬ会計」とがあることを教え、社会科学としての会計学の重要性を改めて認識させるものでもあった。

シェレメット教授の講演と研究発表には、他大学の教員、本学の教員、大学院生、一部・二部の学部学生が参加したが、２回の講演には、会場の教室から溢れる

ばかりの多数の学生が出席した。この学生たちは、日頃あまり直接聞くことのないロシア語をとおして、ユーモアを交えたシェレメット教授の話から、ロシアの激変した社会の現実を学びつつ国際的感覚を養っていた。

なお、本学滞在中、シェレメット教授はつぎの場所を訪問・見学した。1つには日本公認会計士協会の本部を訪問したことである。ここでは、協会長を初めとする役員と懇談し、日ロの会計士協会の相互交流が行われた。2つには日産自動車村山工場を見学したことである。ここで、教授は日本経営の現実を直視した。3つには西日本ロシア経済・財務会計交流ミッションの会合に参加したことである。ここでは、日本海を挟んだ日ロ貿易の発展や日本からロシアへの資本投資にとっては、両国間の財務会計の調和が必要であることが確認された。4つは定例の会計研究会に出席したことである。ここで、教授を中心にして日ロの会計学者間の学術交流が行われた。5つには、センチュリー監査法人を訪問したことである。ここでは、法人代表者を初めとする役員と懇談し、教授は日本の監査制度のあり方に強い関心をもつとともに、日ロの監査人の相互交流が行われた。

なおまた、今回の来日の機会にシェレメット教授から日本では入手不可能である貴重な資料の提供を受けたが、森章はその資料を活用してロシアにおける会計改革についての論文を『明大商学論叢』誌に発表することができた。

さらに、シェレメット教授帰国後の1994年8月、森章は新生ロシアに対する知的支援の一環としてモスクワで開催された日ロ国際会計基準セミナーに参加し報告を行ったが、このセミナーにはシェレメット教授のもとで教えを受けた多数の研究者も出席された。そこで再び、これらの研究者と森章との交流が始まった。こうして、日ロの会計研究者間の国際的な学術交流の輪が着実に広まりつつある。